

雅楽だより

《目次》

●紫綬褒章受章	宮田まゆみ さん	1	●天理教と雅楽(2)	佐藤浩司	7
●上牧・鶴殿ヨシ原		1	●現代語訳『楽家録』(16)	遠藤 徹	9
●6年生が簞篥に初挑戦	中村仁美	5	●情報欄		10
●「陵王」その魅力	加納マリ	5	●『雅音成就』CD発売		12
●東洋英和女学院高等部での雅楽	有泉京子	7	●『舞楽団巻物』富山で初公開		12

第56号
発行

2019(平成31)年1月
雅楽協議会



紫綬褒章を受賞された宮田まゆみさん

笙奏者の宮田まゆみさんが昨年（2018年）11月3日に紫綬褒章を受賞されました。紫綬褒章は「芸術分野などにおける優れた業績等」に対して送られる章で、1999年には芝祐靖氏も受賞されています。

受賞されました宮田まゆみさんにお話しを伺いました。

：紫綬褒章の受章おめでとうございます。

ご感想などお聞かせください。

「ありがとうございます。びっくりしまし

た。一応年齢は大分重ねて、考えますと初めての演奏から今年で40年になろうとしていますが、いつまで経っても笙演奏の入口に佇んでいるような気持ちです。このような褒章をいただきとは信じられませんが、「褒めて下さったことを励みに、もっともっと学ぶ事に熱中していきたいと思いました。

紫綬褒章受章 宮田まゆみ さん

2006年（平成18年）国立劇場の「管絃・失われた伝承を求めて」で秘曲「太食調入調」の演奏を担当させていただいたことをきっかけに、「入調」の復曲をなさつた東京学芸大学教授遠藤徹さんの監修のもとにいろいろな古楽譜の試演を続けています。古い楽譜からはどんどん新しい発見が飛び出しています。古い楽譜からほんとうに「汲めども尽きせぬ泉」のようですね。いにしえの人々がこんなにも豊かな音楽世界を生きていて、それが私たちにも伝えられ、その音楽を享受することができる。なんと幸せなことかと思います。

（2ページ上段に続く）

上牧・鶴殿ヨシ原

簞篥用ヨシは昨年より少ない

着々と進む高速道路建設

簞篥用ヨシ

どんどん減つてきている

簞篥の蘆舌（リード）用のヨシは、上牧・

鶴殿ヨシ原（大阪府高槻市）のみで採取されています。ところが今年もヨシ原にはつる草が生い茂り、ヨシにからまり付き、ヨシを押し倒しています。

さらに昨年の台風は風が強く、ヨシは折れたり倒れたりしています。簞篥用のヨシは昨年に比べるとさらに減っています。ヨシを採取する上牧実行組合の木村和男さんは話しています。（写真1）



(写真1) つる草に押し倒される簞篥用ヨシ。

2018年11月撮影

今後はまたあらためて古典をしつかり学び、それと同時に宝物のように眠っている古楽譜の試演を続けたいと思っています。

ご指導頂きます先生方、いにしえの音楽家たち、共に演奏する仲間たち、お聴き下さる皆さまに心から感謝申し上げます。これからも益々のご活躍を祈つております。お忙しい中ありがとうございました。

宮田まゆみさんのプロフィールを簡単に掲載させていただきます。

国立音楽大学ピアノ科卒業後、雅楽を学ぶ。古典雅楽はもとより、ジョン・ケージ、ヘルムート・ラッヘンマン、武満徹、一柳慧、細川俊夫など現代作品の初演も多く、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラ、C・デュトワ指揮NHK交響楽団、A・プレヴィン指揮ニューヨーク・フィル、大野和士指揮BBC交響楽団ほか国内外のトップオーケストラと数多く共演。加えてラッヘンマン作曲のオペラ『マッチ売りの少女』への出演、パリの秋季藝術祭、ウェイーン・モデルン、ルツエルン、タンブルウッドほか各国の音樂祭への出演、東京、ニューヨーク、パリ、ミラノ、アムステルダム、ウイーン、ローマ、ロンドンなどでのリサイタルと幅広く活躍している。2016年に行なった「甦る古譜と現代に生きる笙シリーズⅢ」によって芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。今まで芸術選奨文部大臣新人賞、エイボン女性年度賞芸術賞、島健蔵音楽賞、横浜文化賞奨励賞、日本伝統文化振興賞、佐治敬三賞、松尾芸能賞優秀賞

など受賞。国立音楽大学客員教授。2018年秋に紫綬褒章を受章。

(1ページ3段最終行より)

高速道路の橋脚建設へ

いよいよ始まつた高速道路建設

ヨシ原を横断する名神高速道路建設の工事が一昨年2017年秋から始まりました。

現在の工事の進み具合は、高速道路の橋脚を建設する場所の整地が終り、資材などを運ぶための工事用道路の整備も終つたところです。(写真2参照 上牧・鶴殿ヨシ原の一部)

2012年4月6日に新名神高速道路の閣議決定がなされてから、高速道路建設反対の10万筆を超える署名を国土交通省に提出しました。建設工事を請け負うNEXCO西日本の中に設置された検討会(「鶴殿ヨシ原の環境保全に向けた検討会」)は9回開催され、その調査・検討した内容は一昨年(2017年)10月に『鶴殿ヨシ原における植物調査に関する報告書』としてまとめられ発行されました。(NEXCO西日本ホームページより事業案内→鶴殿ヨシ原→報告書と順に検索すると読みます)

橋脚は堤防近くのヨシ原の中に1基と淀川沿いに1基の計2基で、橋脚の間は210mで、高速道路はヨシ原から30m上を通ります。淀川対岸では橋脚建設のための取り付け道路の杭が打ちこまれています。(写真3)写真3の手前側が淀川沿いに建設される橋脚の場所です。周りに土のうの様に置かれているのは、砂利を敷き詰めるために取り除か



上牧・鶴殿ヨシ原 2018年7月

(写真2)

上牧・鶴殿ヨシ原を上空より2018年7月に撮影 (写真提供NEXCO西日本)

写真上方(上流)は京都方面、下方(下流)は大阪湾方面

①の場所(川沿いと堤防近くの2か所)に高速道路の橋脚が建設される。橋脚と橋脚の間は210m。橋脚の幅は15m×6m、高さは約30mとなる。

②は、工事区域(施工ヤード)。橋脚の資材などを置いておく場所で、表土をはぎ取り土のうに入れて周りに置き、砂利を敷き詰めている。全ての工事を終えて、工事区域の砂利が取り除かれた後に土のうの表土を元に戻す。

③は、新設された工事用道路。ここをトラックなどが通る。④対岸の工事用杭の(写真3)を撮影した場所。⑤新設の工事用道路(写真4)を撮影した場所。⑥より⑤の方向の工事入り口の(写真5)を撮影した場所。



(写真4) 新設された工事用道路。写真2の(5)より下流を撮影。表土が土のうに入れられて道路の両脇に置かれている。(写真提供・NEXCO西日本)



(写真3) 淀川の対岸には、橋脚を建設する工事用の杭が打ち込まれている。



(写真5) 堤防上(写真2の(6))より淀川方向を撮影。ヨシ原への工事車両の入口。クレーン車が工事を進めている。



(写真6) ヨシがつる草に押し倒されている。このような風景がどんどん広がっている。2018年11月



(写真8) 篠築用ヨシは、つる草からまるヨシから探ししかねない



(写真7) 僅かに残っている篠築用ヨシを探しに、つる草のからまるヨシの中を分け入る木村さん

れた表土です。全ての工事が終ると施工ヤードの砂利が取り除かれ、袋に入れてある表土がもとの場所に戻されることがあります。

つる草に押し倒される

篠築用ヨシ

昨年秋11月、篠築用ヨシの採取できる上牧

のヨシ原(上牧・鶴殿ヨシ原の一部)を上牧実行組合の木村和男さんに案内していただきました。

一昨年(2017年)よりもつる草がヨシを押し倒している面積が増えてきています。

全面的に押し倒されていない場所でも、写真7のよう、つる草にからまり付かれているけれども、なんとか頑張って立つてあるヨシも少しですが生えています。

木村さんは昨年秋のヨシを見回つてから「篠築用のヨシは、昨年(2017年)より少ないのは確実ですね。今まで採っていたところでも生えていなかつたり、つる草に倒されたり、昨年の台風の風で倒されたり、途中から折れているヨシが多い。本数は少ないが質は昨年より良いかと思う」との話です。

篠築用ヨシ

今まで篠築用ヨシが採取出来ていたところ

ろがつる草に覆われて、ヨシはほとんど生えていません。

他の所でも、(写真6)のようにヨシが押

し倒され、つる草ばかりで、ゴミ捨て場か?と間違えてしまいそうな箇所が増えています。

「篠築用のヨシがありそうだ」と木村さん

が探すところも、昔のようなヨシのみが育つところは無く、つる草の中にからうじて育つヨシを探すしかない状況です。(写真7・8)

つる草が増え続ける

つる草が急激に増えてきたのは10数年前からのように思えます。それ以前もつる草は生えていましたが、まだまだヨシ原はヨシ原の様相を見せていました。

ところが4、5年前、特に2013年の台風で冠水してからは、特につる草が多くなつたようです。洪水で山からつる草の種がヨシ原に運び込まれたのではないかと思えます。

さらにそれに追い打ちをかけたと思えるのが、ヨシ原焼きの中止でした。雨が降ったので仕方ないのですが、ヨシ原焼きが出来なかつたのでつる草の種が地に落ちてそのまま芽を出していったのではないかと想像されます。

さらにそれに追い打ちをかけたと思えるのが、ヨシ原焼きの中止でした。雨が降ったので仕方ないのですが、ヨシ原焼きが出来なかつたのでつる草の種が地に落ちてそのまま芽を出していったのではないかと想像されます。

このままでは、篠簾用ヨシの 絶滅を待つしかないのか

木村さんは篠簾用ヨシを維持していくには何としてもつる草を退治しないことにはどうしようもない。検討会の植物研究の先生方がこれという妙案はないでしょうかと尋ねますに何か良い方法はないでしょうかと尋ねますがこれという妙案はないようで、しかし手をこまねいていては篠簾用ヨシの絶滅を黙つてみているだけになってしまいます。

年々つる草は増えています。このまま何の対応策も講じないならば、篠簾用ヨシの絶滅は目に見えていきます。

つる草の退治を

水を流すとつる草は減るが

篠簾用ヨシは育たない

土地に水を十分に与え、乾燥植物であるつる草を減らすことはできます。

上牧・鵜殿ヨシ原でも揚水ポンプで水をくみ上げ、導水路を作り下流まで水を流すことによって、水に浸かっているところ、また水が十分に行き届いた箇所はヨシが増えていません。しかし、それは細く柔らかいヨシで、篠簾用には使えないヨシだったのです。

琵琶湖にも沢山のヨシが生えていますが、この琵琶湖のヨシは水に浸かっているヨシなので篠簾の蘆舌には使用できないのです。

つる草の芽を抜く

水によつてつる草を減らす方法が難しいなら、つる草の芽を早いうちに抜いてはどうかということで、昨年春、雅楽関係者などがヨ

シ原に集まり、生えて来たつる草の芽を抜きました。

しかし、一回、二回抜いたからといつてつる草が減るようなことはありませんでした。抜いても抜いても後からあとからつる草は生えています。夏の暑い時は、ヨシ原の中は30度を有に超すそうです。夏はヨシ原の中での作業は無理とのこと。また、ヨシ原に分け入ったとしても密集して生えているヨシを踏み分けてつる草だけを抜き取るのは困難でしょう。

木村さんも「つる草をなんとかしなくては、どうにもならない。つる草を抜いてヨシを守るというのは限界があり、抜いてもすぐ生えてくる。夏は暑くてヨシ原での作業は無理、ヨシが密集しているところは中に入つていくのも困難」とつる草を抜いていく方法はとても現実的ではないとのことです。

ヨシ原焼きも限界がある

次に考えられるのは、ヨシ原焼きです。つる草の種を確実に焼いてしまうという方法も考えられます。「昔はヨシを立たせたまま焼いていた。灰が積もるぐらい燃えた」といいます。しかし現在は煙や灰の問題、近隣住民との関係、消防署や役所との関係などもあり、ヨシ原焼きは予備日を入れて一日間が予定されています。しかし現在は煙や灰の問題、近隣住民との関係、消防署や役所との関係などもあり、ヨシ原焼きは予備日を入れて一日間が予定されています。煙や灰の関係でヨシを立たせたまま燃やすことは無理。また当日雨ですと焼けません。前日雨でも濡れていて燃えません。ヨシ原焼きにも限界があり、つる草の種を燃やし尽くすというのは現実には不可能に近いのです。

つる草退治の方法

つる草の種が落ちる前に つる草を刈り取り種を取り除く

木村さんは「手をこまねいていてはヨシの絶滅を黙つてみているだけになつてしまふ。どうしたものか、思案して」と話されたのが次の方法です。

「つる草が種を付け、大地に種を落とす前の8月末頃までに、つる草に覆われているところのつる草を全て刈り取つてしまふ。当然ヨシも刈り取つてしまわざるをえないのだが、つる草の生い茂つてしまつた箇所は篠簾用のヨシは採取できないので、その箇所でのヨシの採取をその年はあきらめざるを得ない。身を切られるような思いだが、翌年つる草が少しでも少なくなるように、ヨシが少しずつでも増えていく様にするため、つる草の生い茂つている個所のつる草を、種の落とす前に全て刈り取る方法が、今までの最善の策ではないだろうか」と提案されています。

木村さんがいろいろと考える中から考え方された篠簾用ヨシを育てる為のつる草退治の方法を聞いて「是非この案を多くの人に知つてもらいたいので『雅楽だより』に書いてもらいたい」という了解をいただきました。そこで書かせていただきました。

雅楽体験授業を開催して

木村和男

11月30日高槻市上牧小学校6年生に雅楽教室を致しました。

生徒数は48名（2クラス）です。3時間目と4時間目の2回に分けて行いました。

雅楽の樂器に触れて生徒たちは楽しい時間を過ごしたと思います。篠簾と笙と龍笛の3つの樂器の説明、そして越天樂を篠簾で演奏しました。はじめての演奏でも子供達は音を出していました。とてもびっくりしました。

子供達は良い経験をし、篠簾のリードは淀川のヨシを使っていること、ここヨシは非常に良いヨシであることも知つてもらうことができたでしょう。

えてくるはず。風に乗つて種が舞い落ちる種もあるうが、周りのつる草が減ればそれも減る。もし1年で無くならなければ、翌年もまたつる草が種を落とす前に他のつる草を刈り取つて、何もしなければ絶滅に向かうだけです。世界にここにしか生育していない篠簾用のヨシをみんなの手で増やしていきたいと願っています。

地元（上牧・鵜殿五領地区）で 雅楽の紹介や演奏会を

また、木村さんは、地域の方々に雅楽を知つてもらうことがとても大切と昨年11月30日に上牧小学校で雅楽教室を開催されました。

木村さんと授業をされた篠簾奏者の中村仁美さんから雅楽体験授業の感想などを寄せていただきました。以下お二人からの感想を掲載します。（鈴木治夫）

6年生が篠篥に初挑戦

中村仁美

ヨシが黄金色に輝く晩秋の頃、篠篥の蘆舌に使用されるヨシが生えている淀川の河川敷に近い、上牧小学校を訪ねて、長谷川直子さんと共に雅楽体験授業をさせていただきました。

この地域の方々がヨシ焼きなどの大変な作業を行つてヨシを守つてくださるお陰で、私達は蘆舌を作り篠篥を吹くことができるのですが、案外地元の方は、そうしたことを知らなかつたり、雅楽を聞いたことがなかつたりするとのことです。

今回、上牧で長年ヨシ刈をなさつてゐる木村さんが学校とつないでくださり、子どもたちにヨシ原の素晴らしさを伝えながら雅楽や篠篥の魅力を伝えられる機会をいただけたのは、本当に嬉しいことでした。

今年の6年生は、4年生のときに雅楽の演奏を聞いているだけでなく、ヨシズ作りの体験もしたこと。授業の最初から樂器の名前もヨシのことも知つていて、さすがです。

まずは篠篥の唱歌を歌つてから、全員に篠篥を渡して音を出してみました。なかなか音が出なかつたりするのですが、蘆舌のくわえ方を変えたり息を強く入れたりして音が出ていたとき、とつてもいい表情をしてくれます。龍笛にもトライしましたが、なかなか音は鳴りません。感想を聞くと、「思つたより難しかつた。」「聞いたことはあつたけれど、初めて音を出してみることができて良かった」とのこと。自分で吹いた後はさらに興味を持つ

て演奏を聴いてくれたようです。

学校はヨシ原のすぐそばにあります。高い堤防に登らなければ見ることができます。高ん、ヨシを使う生活やヨシズ作りが昔の話となってしまった今、放つておけば子どもたちはヨシの存在に気付く機会すらなくなっています。

小学校では、子どもたちが地域の自然環境に関心が持てるようにと、地元のヨシを取り入れた授業として、3年前から4年生にはヨシズ作りの授業を組み込むなどの取り組みをしています。今回の雅楽体験授業も、校長先生や6年生の担任の先生がとても熱心に参加してくださいり、先生方の関心が子どもたちに伝わって、とても良い授業になつたと感じました。

授業が終わつたあと、ヨシ原を歩いてみましたが。茶色の穂が揺れる美しい風景ではあるのですが、以前よりヨシが減つていて、妙に見通しが良くなつていて気づきます。

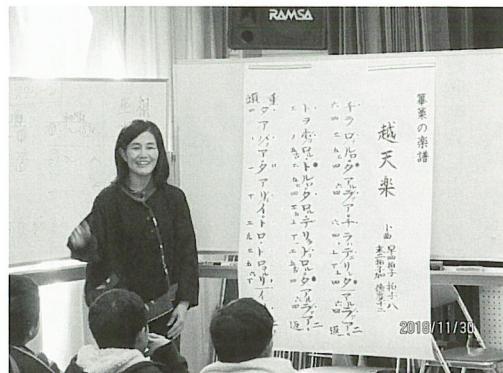
聞けば、冬にヨシ焼きができるため、シミのないきれいなヨシが育つたものの、猛威を奮つた台風の強風で葉が飛ばされたり、折れてしまつたりしたといいます。上牧小学校の体育館の屋根も一部飛ばされてしまつて修復工事中でしたから、本当に猛烈な風だったようですね。さらに、夏の猛暑。イネ科の植物だけに猛暑には弱いそうです。

そして何より、つる草の害が大きいと感じました。つる草が以前より広くはびこり、折角育つたヨシが絡め取られて倒されているさまを見ると、唖然とします。明らかに毎年つ

となると、大変な労力です。知恵を出し合つて何らかの対策を立てて、実行しなければ手遅れになるのではないか、と危機感を持ちました。

一方では、高速道路の工事は着々と進み、整地された土地の向こうに橋脚の土台ができる始めました。

今日出会つた子どもたちが大人になつた時にも、ヨシ原が広がるこの風景が残つていてほしい、と強く感じた一日でした。



雅楽体験授業 みんなで篠篥の唱歌を歌う上牧小学校
6年生 指導は中村仁美さん
2018年11月30日 写真 木村和男



2006年撮影ヨシの間から青空が。
今では想像もつかない。

「陵王」その魅力

加納マリ（武蔵野音楽大学非常勤講師）

(2018年11月10日 国立劇場公演)

『陵王』を巡る』プログラムより)

今日の主役『陵王』たちは、龍の頭をイメ

して、長い伝統のなかで培われてきたもので

す。

『陵王』（蘭陵王ともいいます）は、中国の南北朝時代（五～六世紀）にあつた北齊（五五〇～五七七）という國の蘭陵王長恭（五四一～五七三）の伝説に基づいて創られた作品です。鎌倉時代の樂書（雅楽について

書かれた書物)『教訓抄』には「陵王」について二つの伝説が書かれています。一つは「唐時代の書物による」と、北斎の蘭陵王長恭といふ王が国を鎮めるために戦いに出了。しかし、彼はほかに並びがないほど才知武勇に優れていたうえ顔が美しかったため、兵士たちが戦わず将軍ばかり見ていた。長恭は、これでは士気が上がらないと恐ろしげな仮面をつけた指揮をとつたところ、無事に敵を討つことができたという。そこでその人々がその姿を舞にした。この舞には勇ましく指揮をする型がみられ、天下泰平や国土が豊かになるよう願つて舞われる(筆者要約)といふのです。つまり、「陵王」は平和を願う舞として誕生したのです。現存の「陵王」にはこの由来によるものが多く、今日のプログラムのうち、東京都の小野雅樂会による舞樂「陵王」は戦勝を祝して舞うめでたい舞、秋田県にかほ市の「小滝のチヨウクライロ舞」や山形県寒河江市の「平塙舞樂」は人々の平和や長寿を祈る舞として、舞われています。

『教訓抄』のもう一つの伝説は、「脂那国(中国の古称)」という国の王が隣の國の王と戦っている間に亡くなり、その息子が即位して國を治めようとした。しかし、戦いは終わらず、父の墓前で嘆いているとその墓の中から声が聞こえてくる。「日が暮れかかり戦いに敗れそしたら嘆くことはない、私が神魂を飛ばして太陽を元に戻そう。そうすればお前は戦いに勝つことができる」と。父は没しようとする太陽を招いて昼間に戻したので、息子は明るい中で思うように隣国を討つことができ

書かれた書物)『教訓抄』には「陵王」について二つの伝説が書かれています。一つは「唐時代の書物による」と、北斎の蘭陵王長恭といふ王が国を鎮めるために戦いに出了。しかし、彼はほかに並びがないほど才知武勇に優れていたうえ顔が美しかったため、兵士たちが戦わず将軍ばかり見ていた。長恭は、これでは士気が上がらないと恐ろしげな仮面をつけた指揮をとつたところ、無事に敵を討つことができたという。そこでその人々がその姿を舞にした。この舞には勇ましく指揮をする



型がみられ、天下泰平や国土が豊かになるよう願つて舞われる(筆者要約)といふのです。つまり、「陵王」は平和を願う舞として誕生したのです。現存の「陵王」にはこの由来によるものが多く、今日のプログラムのうち、東京都の小野雅樂会による舞樂「陵王」は戦勝を祝して舞うめでたい舞、秋田県にかほ市の「小滝のチヨウクライロ舞」や山形県寒河江市の「平塙舞樂」は人々の平和や長寿を祈る舞として、舞われています。

『教訓抄』のもう一つの伝説は、「脂那国(中国の古称)」といふ国が隣の國の王と戦っている間に亡くなり、その息子が即位して國を治めようとした。しかし、戦いは終わらず、父の墓前で嘆いているとその墓の中から声が聞こえてくる。「日が暮れかかり戦いに敗れそしたら嘆くことはない、私が神魂を飛ばして太陽を元に戻そう。そうすればお前は戦いに勝つことができる」と。父は没しようとする太陽を招いて昼間に戻したので、息子は明るい中で思うように隣国を討つことができ

たという。のちの人がこれを歌舞にし、「没日還午樂」と名付けた(筆者要約)といふのです。こちらは奇跡を描いたものです。新潟県糸魚川市能生の「陵王」は、おそらくこの伝説に基づいていると思われます。能生の「陵王」が奉納される白山神社は日本海に面した小高い丘の上にあり、夕日が美しく見えます。日没の太陽を背にして舞う「陵王」は、赤い装束がさらに赤く映え、まさに戦う勇壮なさまを再現する光景です。別名「日招きの舞」ともいわれています。今日は屋内の舞台での公演ですから、どんな演出になるのかたのしみです。

中国に起源を発する舞「陵王」は、八世紀に来日した仏哲といふ林邑国(現在のベトナム)の僧が伝えたといわれ、現在では宮内庁樂部をはじめ、春日大社、四天王寺など多くの神社や寺で舞われています。小野雅樂会の舞樂「陵王」は、この流れを汲みます。一方、各地に伝承されている「陵王」は、この舞樂「陵王」がいろいろな経路を経て伝わり、それぞ

れの地で独特の舞として残ってきたものと考えられます。

王の風格を表し、力強く、堂々と舞う「陵王」は、美男子ゆえに戦時には仮面をつけて勇壮に見せなければならなかつた蘭陵王長恭の心の二面性を描いており、大変魅力的です。日本各地には「陵王」の面が多数残されていますが、それはそうした長恭への畏敬の念によるものかもしれません。また、いずれの「陵王」も大人の男性が一人で演じることも、王にふさわしい姿が望まれてきたからでしょう。稚兒舞のみが伝承されている富山県の芸能には「陵王」がないというのも、その表れではないでしょうか?

「陵王」の面は切頬といふあごの部分が切り離された獨特の面で、あごの部分が面の後ろから吊り下げられて、自由に動きます。赤い装束を着け、右手には「舞樂」では金色の桴(太鼓のバチのようなもの)、「チヨウクライロ舞」では笏(手扇)、「平塙舞樂」や「能生白山イロ舞」では笏(手扇)、「平塙舞樂」や「能生白山神社舞樂」では中啓(扇の一種)を持って舞います。舞う姿もその伴奏をする音楽も、それぞれ全く違うことが注目されます。



小野雅樂会による舞樂「陵王」は笙、筆

築、龍笛、鞨鼓、樂太鼓、鉦鼓といった雅樂

樂器によるにぎやかで華やかな大合奏に乗つて舞われます。陵王が登退場する時の音樂(「陵王乱序」)は笛(龍笛数本)と太鼓と鉦鼓だけで演奏され、太鼓の単純なリズムが繰り返される中、数本の笛が同じ旋律を輪唱のよう吹くのがとても面白い曲です。中間の舞は全ての樂器による合奏に乗つて、陵王が舞台の四方で同じような型を見せます。戦で勇ましく指揮する王の姿を想像してみてください。一方「チヨウクライロ舞」は笛一・太鼓一・チャッパー・唱歌一、「平塙舞樂」では笛一、太鼓一、磬一、「能生白山神社舞樂」では笛三・六・太鼓一と音が少なく、雅樂の舞樂とは大きく異なる音楽になつています。それぞれの地には、舞樂「陵王」の登退場の音樂、「陵王乱序」の部分だけが残つたのではないかと考えられます。伝承以来、長い時間の流れの中で音樂が少しずつ変化し、それぞれの土地特有の響きになつていつたといえるでしょう。

ところで、「陵王」といえば、平成十七年に放送されたNHKの大河ドラマ「義経」のタイトルバックを思い出される方もいらっしゃるでしょう。安芸の宮島にある厳島神社の海上舞台で舞う舞樂「陵王」です。厳島神社ではいまでも年に数回、「陵王」が舞われています。また、今月末から十二月にかけて、宝塚歌劇団花組公演で、「ロマンス「蘭陵王」(美しすぎる武将)」が上演されます。ここでは陵王がどのように描かれるでしょうか? 蘭陵王長恭の伝説は日本だけでなく、長恭の生地中国でも人気があり、京劇や、テレビ

ドラマにもその数奇な運命や恋物語などが織り込まれています。今日は、「陵王を巡る」という公演です。各地に伝承されている「陵王」の魅力を巡りながら、お楽しみいただければと思います。

東洋英和女学院高等部での雅楽

音楽科 有泉京子
東洋英和女学院中学部高等部

高等部三年生の選択科目である音楽Ⅲの授業で、昨年より雅楽を実習として取り上げています。受験生でもある高校三年生の選択授業なので、この授業を選択するのは音楽系や芸術系の進路を希望する生徒か、あるいは本当に音楽の好きな生徒か、いずれにしても例年10人弱の少人数で行う授業となっています。私自身が雅楽を大好きなことから、生徒達にも雅楽の世界を知つてほしいと願い、毎年雅楽について授業内で取り上げる時間ももつてきました。雅樂について説明をし、音源を聴かせたり、また自分の所有している笙・簫・龍笛を実際に見せたり音色を聴かせたりしていました。多くの時間を割けるわけではありませんでしたが、どの年の履修生徒も雅楽の響きに心地よさを感じてくれているようでした。雅楽を実習として取り上げたいという思いがありましたが、楽器確保の問題からなかなか実現に至らない年月が過ぎていました。雅楽実習を実行に移す機会は昨年度に訪れました。理由は単純で、音楽Ⅲの履修生徒が4人と、例年以上に少人数だったことで、本来ならば憂るべき事態かもしれません



東洋英和女学院 生徒による簫築の演奏

の樂器を手にするのか話し合っている姿には微笑ましいものがありました。また雅樂の響きだけでなく、簫築の内側に塗られている朱の色や笙の形など、細かいところにまで目を向けて「きれいだ」と言ってくれるのを聞くと、私も嬉しくなります。今年度も昨年同様、音を出すことにくじけそうになりながらも、7月にコロンビア大学との共演をさせていただきました。今は10月の楓祭に向けて、簫築とピアノで文部省唱歌のふるさとを演奏したいと、西洋樂器とのピッチの隔たりに苦戦しつつも練習に励んでいます。

話が逸れますか、今年度私は国語科教諭かんが、この人数ならば一人ひとりに樂器を用意してあげられるとプラスに考えて実習を始めました。実際に実習をしてみて難しいと感じたのは、音がすぐに出てこないので、生徒たちがくじけそうになつてしまふことです。それでも昨年度は、7月にコロンビア大学の学生の方々と共に共演させていただいたこともよい刺激となり、10月の楓祭（文化祭）では簫築2名、龍笛1名、笙1名の計4名で越殿樂を演奏しました。

1人でも多くの生徒の心に、日本の音楽の美しさが届くことを願っています。

天理教と雅楽 (2)

天理大学名誉教授 雅樂部総監督 佐藤浩司

今年度の音楽Ⅲの履修生徒は2名と、昨年度よりもさらに少人数で行っていますが、雅樂にとても関心を示してくれる生徒達です。初めは私の所有している樂器を貸し出して練習を始めましたが、生徒達から「自分の樂器を持ちたい」と申し出があり、それぞれが簫築を購入しました。届いた樂器がそれぞれ柄の異なる収納袋に入っているのを見て「どちらも素敵だ」と目を輝かせ、どちらがどちら

別の数次にわたる講習会を開催するなど、各地で盛り上がりを示し、同年10月26日、秋の大祭の夜、「舞樂奉納の夕」と銘打ち、本部雅樂部と、青年会の共催で、野外講堂を舞台に演奏会を開催した。出演団体は、天理高等学校一部・二部、愛知教区、東京教区、大阪教区の各雅樂部で、このとき東京教区は、新作舞樂「陽和樂」を披露した。この演奏会の反響は大きく、その後、各教区、各教会での雅樂熱は高まり雅樂部の結成や講習会が相次いでいます。

翌昭和28年2月11日には、本部雅樂部が大正12年に第1回を記した演奏会を、「よなほり演奏会」として復活し、10月25日には、青年会主催「青年雅樂発表会」が天理教館において開催された。この演奏会には、天理教専修科など7団体が出演した。昭和29年4月には同じく青年会主催で「舞樂の夕」(於・天理教館)が開かれ、4団体が参加し、中でも東京教区は新作舞樂「黎明」を発表し、また、大阪教区は『迦陵頻』(かりよひん)を童舞で披露した。さらにこの年10月25日には、前年に引き続き天理教館)が開かれ、4団体が参加し、中でも東京教区は新作舞樂「黎明」を発表し、また、大阪教区は『迦陵頻』(かりよひん)を童舞で披露した。青年雅樂演奏発表会(於・天理教館)が開催され、12団体が出演した。

昭和30年になると、雅樂だけでなく、天理教の音樂活動に一大転機を迎えた。この年の9月27日、天理教音樂研究会が「おつとめ」研究会の一部門として雅樂部も置かれ、天理教内雅樂同好者の「一手一つ」が図られるなど、新しい天理教の雅樂の方向を見出した。しかし雅樂部門が実際の活動に入るにはまだ

数年を要した。なお、発足当日行われた発表式記念演奏会に管絃2曲が演奏されている。

昭和31年は教祖70年祭の執行された年で、このとき、記念の演奏会が1月25日、28日、2月5日、15日と開かれており、このうち、28日は、青年会恒例の舞楽の会であった。翌昭和32年新春の1月3日には、日本短波放送の要請により、本部雅楽部が吹き込んだ『林歌』が放送され、また、4月20日には青年会主催にて「雅楽と舞楽の夕並びに映画会」(於・天理教館)が催された。定例となつた青年会主催の舞楽の会は、昭和33年10月26日、教会本部神殿前の泉水プールの特設舞台で、第2回天理教芸術祭の一環として開催され、このときは「雅楽お供演奏会」と銘打ち、総数150名余の大合奏が行われた。演奏会の後、分会別演奏会が旧炊事場を会場に催され、9団体が参加した。

昭和35年は、教会ごと、地域ごとの雅楽講習会が多く開催された年で、一例をあげると、2月25日～3月1日山形教区(第3回雅楽講習会)、3月26日～28日青年会敷島分会、4月15日～20日室蘭支部ひとじ会(第3回雅楽三曲講習会)、8月10日～12日旭日大教会、8月17日～19日深川大教会雅楽部、9月2日～4日青森教区青年会、9月2日～5日三重教区青年会、9月3日～5日青年会甲府分会、10月1日～5日宮崎教区都城支部雅楽同好会などである。教会本部でも、この年の6月4日から6日、元宮内庁楽師豊昇三を講師として笙の講習会を開催しており、その後、本部では、毎年元宮内庁楽師を招いて講習会を開

昭和32年新春の1月3日には、日本短波放送の要請により、本部雅楽部が吹き込んだ『林歌』が放送され、また、4月20日には青年会主催にて「雅楽と舞楽の夕並びに映画会」(於・天理教館)が催された。定例となつた青年会主催の舞楽の会は、昭和33年10月26日、教会本部神殿前の泉水プールの特設舞台で、第2回天理教芸術祭の一環として開催され、このときは「雅楽お供演奏会」と銘打ち、総数150名余の大合奏が行われた。演奏会の後、分会別演奏会が旧炊事場を会場に催され、9団体が参加した。

昭和35年は、教会ごと、地域ごとの雅楽講習会が多く開催された年で、一例をあげると、2月25日～3月1日山形教区(第3回雅楽講習会)、3月26日～28日青年会敷島分会、4月15日～20日室蘭支部ひとじ会(第3回雅楽三曲講習会)、8月10日～12日旭日大教会、8月17日～19日深川大教会雅楽部、9月2日～4日青森教区青年会、9月2日～5日三重教区青年会、9月3日～5日青年会甲府分会、10月1日～5日宮崎教区都城支部雅楽同好会などである。教会本部でも、この年の6月4日から6日、元宮内庁楽師豊昇三を講師として笙の講習会を開催しており、その後、本部では、毎年元宮内庁楽師を招いて講習会を開

昭和35年12月4日、天理教音楽研究会主催の「歌う一手一つ」(於・天理教館)に本部雅楽部が出演し、『蘭陵王』『胡飲酒破』など4曲を演奏した。翌昭和36年6月3日、「おぢば」で雅楽を学ぶ者の技術の向上と相互の親睦を図るため、第1回雅楽交歓演奏会が開かれ、教会本部、天理大学、天理教校専修科、天理高校一部・二部、和行会(天理高校一部雅楽班の卒業生の会)が参加した。この集まりが基礎となつて、将来、音楽研究会雅楽部門の充実を見るようになる。

昭和37年10月26日、青年会主催「雅楽お供演奏」が本部中庭で開かれ、参加者全員で『鶴徳』『越殿樂』の演奏の後、会場を本部炊事場2階に移し、参加団体別の演奏会を行つた。この演奏会は、翌昭和38年の10月26日にも同形式で行つてゐる。昭和38、39年は、各地における雅楽の活躍がみられた。たとえば、河原町雅韻会は、38年11月10日、京都雅楽連合会主催の「雅楽の夕」に出演、同年11月23日、愛知大教会では「雅楽コンクール」を開催、39年2月1日、栄木教区青年会は、ラジオ柄木から『抜頭』など数曲を放送した。

昭和40年、天理教音楽研究会の創立10周年を記念して、6月13日、大阪フェスティバルホールにて演奏会が開かれ、雅楽部は、管絃

で「越殿樂」「陪臤」を、また舞楽『万歳樂』を舞奏、さらに矢野清編曲による雅楽と吹奏楽のための合奏曲『長慶子』が、器楽部と合奏で演奏された。この演奏会に備えて、教会本部、天理大学、天理高校、天理教校専修科を中心に入門者が組まれ、その他、各地の教会の有志なども加わり、練習が行われた。また6月5日には、天理教館を舞台に第8回天理教音楽研究会定期演奏会を、フェスティバルホールの前哨戦として開催した。

音楽研究会10周年記念演奏会は、雅楽部門に良い刺激となり、以後飛躍的な発展を遂げることになる。ことに教祖80年祭が執行された昭和41年には、4月24日、本部中庭で年祭記念のお供演奏会を始め、秋には天理大学が主催して、「おぢば」の各学校で雅楽を学ぶものを一同に会しての演奏会を開いた。さらには、青年会は、第1回の雅楽講習会を開催するなど多彩となつて行き、お供演奏会は後に行われる大合奏の布石となり、大学主催の演奏会は定期演奏会となり、青年会の講習会は毎年開かれて、年々その充実度を増し、天理教の雅楽人口の増加と、技術の向上に寄与するようになる。

昭和42年には、青年会の講習会、大学の定期演奏会のほか、大阪教区雅楽部は創立20周年の記念演奏会(於・大阪厚生年金会館文化ホール)を行い、天理高校一部雅楽班は、全国音楽教育連合会研究大会滋賀大会で演奏するなど対外的にも活躍した。10月25日、真柱繼承奉告

祭を記念して、「三千人による雅楽演奏会」を開催して、他に類のない天理教ならではの3000人による雅楽の大合奏を、岡正雄指揮のもと行い、青年会は海外研修隊を組織して、東南アジアを巡回した折、各地で雅楽を披露し、さらに、プラスチック製の雅楽器(筆篥と龍笛)を作成したからである。なお、プラスチック(樹脂)製の楽器は、西尾実の熱意とニッポー楽器の努力によって完成したもので、鳳笙は昭和45年に完成している。これらは、本管に比べいささか難点もないとはいえないが、雅楽普及のために果たしている役割は大きい。樹脂製の楽器は、今日ではさらには、改良が加えられている。またこの年、京都舞楽会の石昇子を招いて舞楽講習会を開催、その後、回を重ねて右舞の指導を受けている。このように、天理教の雅楽は、年々質量ともに上昇の一途を辿り、以後、昭和44年、教会本部雅楽部第1回公開演奏会(於・天理市民会館)、青年会主催指導者講習会、昭和45年、天理高校一部雅楽部万国博覧会出演(エキスポランド野外劇場)、本部雅楽部万国博覽会出演(地方自治体館)、青年会主催雅楽お供演奏会(地方自治体館)、青年会主催雅楽お供演奏会(本部神殿前泉水プール特設舞台)、ほんあづま少年会雅楽部東京都民芸大会出演(日本橋三越本店)、昭和46年、天理大学雅楽部創立20周年記念演奏会(天理市民会館)、ハワイ大学雅楽部訪日研修団と本部雅楽部の交歓練習会など、内容も多彩となつてゐる。この頃、本部では東井忠則、鈴木寿、植田英次らが活躍している。

さて、天理教音楽研究会雅楽部の活動は、

この頃より実質的となり、昭和47年より青年会との共催で雅楽指導者講習会を、講師に宮内庁楽部の上明彦、豊英秋、大窪永夫の3人を招いて毎年開催した。また同年には、少年会と共に第1回少年雅楽勉強会を開催し、以後毎年開催している。昭和48年には、音楽研究会内に雅楽器相談室を毎月26日開催し、楽器の修理や購入の相談に応じるようになり、昭和50年からは、筆箋のリード製作講習会、また、昭和51年には、筆箋のケース製作講習会など、演奏技術の向上ばかりでなく楽器についての知識の習得を図るなど、活動も多方面にわたっている。昭和50年、音楽研究会も創立20周年を迎え、10月には、20周年記念雅楽お供演奏会を、本部神殿南側にあつたグリーンステージで行い、翌51年4月29日、京都会館第1ホールを会場に、記念雅楽演奏会を開催した。この日、岡正雄作曲による雅楽交響曲『陽気づくめ』が発表された。この曲は、雅楽器のほかに、「おつとめ」の鳴物である拍子木、小鼓、胡弓が使用され、さらには雅楽律のオルガンと合唱を加えて演奏された。うたの部分は、「おふでさき」第14号25・26と、第10号103のおうたに旋律がつけられたもので、これによって「おうた」「11」「」に配列された。

昭和52年2月からは、月例雅楽勉強会を、上記の上、豊、大窪の3人を講師として開始、53年4月より、雅楽部の活動を広く紹介する『雅楽部報』を月1回発行するようになった。昭和53年8月25日、宮内庁樂師5名（笙・多忠磨・筆箋・東儀兼彦、龍笛・芝祐靖、琵琶・

山田清彦、箏・東儀俊美）による「紫絞会天理公演」を天理市民会館にて開催。昭和53年5月25日、音楽研究会の雅楽講師の認定試験が行われ、22名が選ばれている。また、昭和54年2月から、毎月1回の本部勤務者の雅楽練習会を始めた。54年5月12、13日、糸物講習会（琵琶・東儀勝、箏・東儀兼彦）を開催して、順次内容を充実していく。54年11月25日、第1回演奏会を開催した。この時は、音楽研究会単独の公演ではなく、本部雅楽部や管内学校が出演する、今日の雅楽一手一つに相当するものであった。翌昭和55年の第2回定期演奏会より、実質単独の公演となり、毎回多彩な曲目をもつて臨んでいる。昭和63年の第10回定期演奏会では、舞を指導していた原（右）笙子が『青海波』の舞を、翌平成元年の第11回では岡正雄主任講師が左の『還城樂』を、平成3年の第13回では上明彦宮内庁樂師が『蘭陵王』を、4年の第14回には豊英秋樂師が右の『還城樂』を、5年の第15回では大窪永夫樂師が『胡飲酒』を舞っている。さらに平成7年の第17回には上記3人が音頭となつて管絃の盤渉調『越殿樂残樂三返』と『蘇莫者』を演奏、9年の第19回定期演奏会では、豊、大窪の『振鉾三節』の舞を、上は樂頭として打物を担当し、その優れた技を披露して、多くの聴衆を魅了した。平成6年6月25日には、この3人が主宰する「十一音会」が天理市民会館にて演奏し、教内の雅楽愛好者への大きな刺激となつた。なお、昭和55年11月25日第1回「雅楽一手一つ」を開催し、以後毎年開催している。

山田清彦、箏・東儀俊美）による「紫絞会天理公演」を天理市民会館にて開催。昭和53年5月25日、音楽研究会の雅楽講師の認定試験が行われ、22名が選ばれている。また、昭和

現代語訳『楽家録』(16)

監修 東京学芸大学教授 遠藤 敏

十三 三管総論

第四十八 萬秋樂の大曲吹の説

「大曲吹」ということについては、詳しくは前章を見なさい。「萬秋樂」を舞楽で略して奏するとき、四帖にこの「大曲吹」がある。（五帖半より「大曲吹」となるのはいつもの様式である。因つてこの説は述べない。）この四帖は、始めから終わりまで延八拍子であるが、半帖より以下は於世吹で吹く。これが即ち「大曲吹」である。（いわゆる於世吹は的々拍子である。）

およそ「萬秋樂」の演奏の仕方には三説がある。一つは、序と一帖の合わせて二帖を用いる。（このときは「大曲吹」は無い。）二つめは、序と一二三四帖の総じて五帖を用いる。このときは、四帖より「大曲吹」となる。三つめは、序と一二三四五帖の総じて六帖を用いる。このときは四帖の半帖より於世吹となる。一説に五帖の第七拍子より於世吹とする説もある。「第三の説には」以上の両説がある。

第四十九

「萬秋樂」の中間で笙の音を止める説

「萬秋樂」の中間で暫くの間、笙の声を止め、奏さない説がある。（近代は、筆箋もこれに倣い、吹かない説があるが、これはいかがなものか。）『體源鈔』に「最勝四天王院のみであり、詳しく述べて、終卷に掲げておく。

利秋は豊原氏で笙の師で於世吹の「見解」の相違のところは、五帖の第八拍子以後、四文「四小節」より於世吹とするのが宗賢の説であり、半帖より於世吹とするのが利秋の説である。（後者は鳳笙の譜に見られる。）

第五十 「萬秋樂」微音の説

「萬秋樂」の秘密の譜面に微音という説がある。（他曲にはこのことはない。）小さく微「かすかに」ひそかに吹くのでこの名がある。その説は以下の理由によるものであろう。この曲は、釈尊の説法のときに、弥勒菩薩が整定して奏したもので、ある人によると「天人が降り現れてこれを奏したのがその始まりで、その後、日藏上人が唱歌で本朝に伝え、その故に一名「唱歌万秋樂」という。また、ある人によると「婆羅門僧正がこれを伝えた」「東大寺の實忠和尚がこれを伝えた」とも言う。その説「由来についての説」は一つではないが、そもそもこの曲は法華經八巻を表すときは八帖に吹き、九品を表すときは九帖に吹く。「いずれにしても」仏の曲であり、柔軟を以つて主とするものである。それ故に微音でこれを奏するのである。」云々。

第五十一 「萬秋樂」微音の説

評定「演奏の仕方についての検討」が行われ、五帖の於世吹について宗賢と利秋で意見が相違することがあった。どちらで吹くか決まらなかつたため、利秋は暫く笙の音を止めた。その後は大法会のとき、三度この方法を用いた。云々」とある。

（私見による）宗賢は大神氏で笛の師、利秋は豊原氏で笙の師で於世吹の「見解」の相違のところは、五帖の第八拍子以後、四文「四小節」より於世吹とするのが宗賢の説であり、半帖より於世吹とするのが利秋の説である。（後者は鳳笙の譜に見られる。）

冬～春までの主な雅楽演奏会など

NHK Eテレ 雅楽

1月1日(火) NHK FM 午前9時～15分
ラジオ第二 午後1時45分～2時
双調音取 酒胡子 催馬樂 安名尊

管絃 納曾利
舞楽 演奏 宮内庁式部職樂部
厳島神社 歳旦祭・地久祭 (広島)

1月1日(火) 午前5時55分～6時15分
午前5時半より地久祭の祭典

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月5日(土) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

1月1日(火) 午前5時半より地久祭の祭典
後 舞楽 甘州 林歌 拔頭 還城樂

演奏 天王寺樂所 長慶子 (ちよづかし)
熱田神宮 踏歌神事 (愛知)
1月11日(金) 午前10時・午後1時
卯杖舞 扇舞 竹川半首 萬春樂

何そもそも
問合せ TEL 052-971-4151

1月11日(金) 午後1時ごろ
内宮神樂殿東隣 演目 東遊 (あずまうなび)

伊勢神宮 一月十一日 御饌 東遊(三重)

問合せ TEL 0596-24-1111

春日大社 舞樂始式 (奈良)

1月14日(月) 午後1時 林檎の庭

管絃 壱越調 音取 迦陵頻

振鉢三節 萬歳樂 地久 長慶子

問合せ TEL 0742-22-7788

「雅樂はすごい!」 レクチャーコンサート (三重)

1月18日(金) 午後2時

一般 1000円 学生 500円

三重県文化会館中ホール

講師 野原耕二 演奏 笠 野津輝男

筆篥 高多祥司 横笛 笠井聖秀

主催 三重県文化会館

三重県生涯学習センター

問合せ TEL 03-3392-8891

1月19日(土) 10時～2時～2回 無料

大和百貨店高岡店(高岡市御旅屋町) 初売りの舞楽 (富山)

問合せ TEL 059-233-1150

1月19日(土) 10時～2時～2回 無料

問合せ TEL 0470-73-10001

小金井 宮地樂器ホール 大ホール

盤渉調 青海波 越天樂

萬歳樂 落蹲

問合せ TEL 042-380-8099

舞樂・雅樂入門～天王寺舞樂に触れる よみうりカルチャードーム(東京)

問合せ TEL 03-3392-8891

1月23日(水) 午後6時半 5000円

大学生以下3500円

東京 神田明神祭務所地下ホール

演奏 天王寺樂所

問合せ TEL 03-3392-8891

1月23日(水) 午後6時半 5000円

チケットプレゼント有り
1月23日(水) 午後6時半 5000円

当日2000円 高校生以下無料
勝浦市芸術文化交流センター TEL 03-3630-0038

問合せ TEL 076-232-8111

1月27日(日) 午後2時 2500円
1000円全席指定

石川県立音楽堂邦楽ホール

舞樂 萬歳樂

水芸「滝の白糸」藤山新太郎 他

問合せ TEL 076-232-8111

東京樂所 奉祝の雅樂 (愛知)

1月27日(日) 午後2時 S-6000円

問合せ TEL 052-588-4477

A-4000円 愛知県芸術劇場

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

樂残樂三返 舞樂 萬歳樂 延喜樂

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

問合せ TEL 03-3783-2371

問合せ TEL 03-3783-2371

1月27日(日) 午後2時 2500円
1000円全席指定

新婚檜舞台 (石川)

1月27日(日) 午後2時 2500円

石川県立音楽堂邦楽ホール

舞樂 萬歳樂

水芸「滝の白糸」藤山新太郎 他

問合せ TEL 076-232-8111

東京樂所 第13回定期演奏会 (愛知)

1月27日(日) 午後3時半 無料

名古屋市瑞穂文化小劇場

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

樂残樂三返 舞樂 萬歳樂 延喜樂

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

樂残樂三返 舞樂 萬歳樂 延喜樂

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

樂残樂三返 舞樂 萬歳樂 延喜樂

管絃 平調音取 催馬樂「伊勢の海」 越天

問合せ TEL 03-3783-2371

問合せ TEL 03-3783-2371

1月27日(日) 午後2時 2500円

1月27日(日) 午後2時 2500円

新婚檜舞台 (石川)

1月27日(日) 午後2時 2500円

問合せ TEL 03-3783-2371

問合せ TEL 03-3783-2371

1月27日(日) 午後2時 2500円

問合せ TEL 03-3783-2371

主催 管絃 平調音取 催馬楽「伊勢の海」 楽残樂三返 舞樂 「伊勢の海」 越天
問合せ 株式会社AMATI
春日大社 節分 万灯籠 (奈良)
2月3日(日) 午後5時半ごろ
舞樂 賀殿 直会殿
問合せ Tel.07442-22-7788
太田豊雅 楽りサイタルV.O.I・2 (東京)
2月8日(金) 午後7時半
日暮里サニーホールコンサートサロン
前売り 3500円 当日 4000円
前売り 3500円 当日 4000円
庭火 朗詠新豊 胡飲酒序破 青海波
ぶんのあゆき ふんのあゆき こひゅうぱく せいがは
〈客演〉 豊英秋
問合せ info@otayutakacom
ガチdeチャレンジ! 雅樂編 (東京)
2月10日(日) 午前11時 1500円
※能樂編(2月3日)とのセット券有
小金井宮地樂器ホール 小ホール
出演 伶樂舎
問合せ Tel.042-380-8099
子どもたちと芸術家の出あう街2019 (東京)
ワークショップ雅樂
2月11日(月・祝) 10時~、午後1時~
対象 小学生~高校生 1000円
東京芸術劇場 出演 伶樂舎
問合せ Tel.03-5610-7275
(日本オーケストラ連盟)
慶賀の雅樂 (東京)
2月11日(月・祝) 午後1時~4時
2回無料
三重テラス(日本橋三越前)
舞樂 賀殿 胡蝶 ほか
演奏 多度雅樂会
問合せ Tel.03-3630-0038

聖德太子御正當会（御忌）奉納舞楽	四天王寺太子殿	2月22日（金）午前9時半
舞樂 振鉾 承和樂	東京樂所 雅樂公演	2月24日（日）午後3時 4000円
演奏 天王寺樂所	小中高生 900円	問合せ Tel 06-6641-0084
東海市芸術劇場大ホール	東海市芸術劇場大ホール	（愛知）
樂器紹介 多忠虎（宮内庁式部職樂部樂長）	管絃 盤渉調音取（青海波・越殿樂）	下神明天祖神社境内
樂器紹介 多忠虎（宮内庁式部職樂部樂長）	管絃 盤渉調音取（青海波・越殿樂）	舞樂 還城樂 墇破
樂器紹介 多忠虎（宮内庁式部職樂部樂長）	管絃 盤渉調音取（青海波・越殿樂）	舞樂 蘭陵王 敷手
樂器紹介 多忠虎（宮内庁式部職樂部樂長）	管絃 盤渉調音取（青海波・越殿樂）	問合せ Tel 0562-38-7030
神明雅樂	（東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
2月24日（日）午後5時	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
下神明天祖神社境内	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
舞樂 還城樂 墇破	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
舞樂 蘭陵王 敷手	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
演奏 雅樂道友会	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
伎楽 狮子奮迅	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
管絃 黄鐘調（かいせいちょう）海青樂（かいせいがく）越殿樂（えつでんがく）残樂（ざんがく）三返（さんかん）	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
謡物 催馬樂（さいまがく）美作（みまさか）舞樂（ぶがく）散手（さんしゅ）古鳥蘇（ことりそ）	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
★第41回東京公演 3月8日（金）午後6時 前売2000円 当日3000円	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
新宿文化センタ1	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
問合せ Tel 0743-63-4945	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
和のしらべ「新しき御代を寿ぐ	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
武家の式樂（宮中の式樂）（兵庫）	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371
3月2日（土）午後1時 指定席8千円	（奈良・東京）	問合せ Tel 03-3783-2371

自由席5千円 他	湊川神社神能殿 （まんざいぐらへんのうでん）
出演 天王寺楽所 ほか	主催 阪神能樂囃子連盟 調和会
特別対談 大倉源次郎 & 小野真龍	問合せ Fax 06-4981-2777
浅草 祭礼行事と声明 ————— (東京)	チケットプレゼント有り
3月2日(土) 午後3時 国立劇場 大劇場	【浅草の祭礼行事】
1等 5000円 2等 3800円	木遣り 浅草三社囃子
予約 1月11日(金) 午前10時	神事びんざら舞 白鷺の舞
問合せ Tel 0570-07-9900	【浅草寺の声明】
雅樂の館ひなまつりの雅樂 (富山)	法華八講 五之座・和讃
3月3日(日) 午後1時半 無料	金龍寺浅草寺
高岡市雅樂の館 (高岡市福岡町)	予約
舞樂 萬歳樂	木遣り 浅草三社囃子
管絃 越天樂 (平調) 君が代 他	神事びんざら舞 白鷺の舞
演奏 洋遊会	【浅草寺の声明】
問合せ Tel 0766-64-0390	法華八講 五之座・和讃
浄土の響く天台聲明と天王寺舞樂 (東京)	金龍寺浅草寺
3月5日(火) 午後6時半	予約
前売 5000円 当日 6000円	木遣り 浅草三社囃子
東京文化会館大ホール	神事びんざら舞 白鷺の舞
聲明・引聲 阿弥陀経 他	【浅草寺の声明】
舞樂 抜頭 蘇利古 還城樂	法華八講 五之座・和讃
演奏 天王寺楽所	金龍寺浅草寺
問合せ Tel 03-3392-8891	予約
鎮魂—3・11東日本大震災 (北海道)	木遣り 浅草三社囃子
声明と雅樂アンサンブル遊聲コンサート	神事びんざら舞 白鷺の舞

3月10日（日）午後2時 「新・観想の種子」と 雅楽についてのレクチャコンサート
3月11日（月）午後2時 「平調調子」、声明「四智梵語讃」「吉慶梵語讃」 細川俊夫作曲「新・観想の種子」
問合せ Tel 0120-12-6666 天王寺楽所雅楽伝習所 発表会（大阪）
3月14日（木）午後6時より 大阪国際交流センター 入場無料
春日山春季彼岸会 （福岡）
3月21日（木）午前9時半 春日山雅楽御堂
舞樂 甘州 白濱 演奏 雅楽道友会
下神明天祖神社境内
舞樂 曲目未定 演奏 筑紫樂所
問合せ Tel 092-596-8585
神明雅樂 （東京） （福岡）
3月24日（日）午後5時 舞樂 未定 演奏 南都樂所
3月29日（金） 舞樂 未定 演奏 南都樂所
主韻会 第三回雅楽演奏会（愛知）
3月31日（日）午後1時半 名古屋市中村文化小劇場
管絃 太食調音取 仙遊霞 抜頭 残樂三返 特別演奏 秋風樂（簞篋独奏）
舞樂 落蹲 輪台一具 埴代あり 客演 元宮内庁式部職首席楽長 池邊五郎師 問合せ Tel 090-9194-5600 メール : shuinikai.07.25@gmail.com （アメリカ）

